

昭和四十一年度大会

昭和四十一年度大会は、予定通り、十一月一日(火)・二日(水) 両日に開催した。第一日見学会は、予定通り #山辺の道をたどる # テーマのもとに、山辺道の真上にある東大寺山古墳を皮切りに、天理参考館内の同出土品、石上神社(七支刀見学)、大三輪神社・談山神社・聖林寺を巡回した。京都大学助教授上田正昭・天理大学助教授金関恕両氏の懇切な解説と相まって、古き大和の史跡と風光を満喫した。

第二日総会及び公開講演は、午後一時より京都大学楽友会館において開催。総会は、羽田明理事の司会により、佐伯富常任理事より会務・会計報告を行なった。

公開講演は、大阪市立大学教授藪内芳彦・京都大学教授長広敏雄両氏により、次の通り行なわれた。

ポリネシアの土地制度 藪内 芳彦氏

一九六〇年と一九六五年における西部ポリネシアの実地調査の資料に基づいて、トンガ、サモア、フィジーの土地制度に視点を

をおきながら、さらに文献を介して全ポリネシアの土地制度の基本的性格について論じた。この場合、必要に応じて、メラネシアおよびミクロネシアの土地制度にも言及した。

ポリネシアひいては太平洋諸島の土地制度を論ずるに当たっては、とくに家族制度および親族集団の構造の認識が必要である。

というのは、これらの島々では、一般に最近まで、また今日も、土地はしばしば家族によって、時には氏族によって共同に所有されているからである。

トンガでは、サモアやフィジーとは異って、土地はすべて王に属し、その下で土地は皇族、貴族、マタブレ(代弁酋長)および政府によって所有され、平民で土地を所有する者はない。但し男子が一六歳になると憲法によって一定の農地(St. Home)と宅地(St. Home)の割当を受けることができる。トンガでは、一七世紀のタスマンや一八世紀末のクックやラ・ペルーズの報告によって、農地は各家族(Kaitiaki)に割当てられ、家屋はその中に位置し、条理正しい散村形態を示していたことが知られる。一六歳以上の男子にたいする割当地制度は

一九世紀末のイギリスの顧問の指導によって確立したことは明らかである。

サモアでは、農地は家族(aitu)の長マタイ(matua)によって管理されるが、マタイ自身の思惑によってその土地を処分する性質のものではないので、厳密な意味では彼の個人的財産とはいえない。農地と宅地以外の森林地はすべて村(氏族)の共有地であり、村人ならば誰でもそこを自由に拓いて自分の農地とすることができる。農地の開拓のために家族中に若干数の男子労働力が必要であり、このために長く大家族を温存せしめてきた。村によってはすでに開拓の余地のないものもあり、この場合には、もはや新しいマタイの発生と、それにもなう新しい独立の家族の発生の余地はない。

フィジーでは、土地所有の単位は、場所によっては家族、トカトカ(tokatoka)あるいは氏族、マタカリ(matagalai)であるが、土地所有の構造は一層累層的である。たとえばマタカリの土地が外国人に借地されている場合、その地代がいかに配分されているかということの中に、その累層性が明らかによみとれる。すなわち、集められ

た地代の二五パーセントが地代を集める機
関の費用として控除され、残余の五パーセ
ントはヴァヌア(Vanua、種族《Yavusa》の
連合体)の長へ、一〇パーセントはヤヴサ
の長へ、一五パーセントはマタカリの長へ、
そして集められた全地代の五二・五パーセ
ントがマタカリのメンバーへ配分されるの
である。

さて、トンガでは農地はすでに個人的に
用益権が割当てられているが、サモアやト
ンガにおいても、植民地支配国の共同主義
から個人主義への政策と、一方、世界経
済の波動の濃密化を通じて、個人的農地
が出現しつつある。サモアのタウレアレア
(Taufalea マタイ以外の青年男子)の個
人的農地、フィジーのガララ(Galala、自
由の意、独立農民)がそれである。とくに
フィジーでは、上述の土地支配の重層構造
の下でガララの発生にたいして厚い壁があ
るにわかかわらず、一九三〇年以来ガララの
発生が顕著である。しかしガララたらんと
する者は自己の所属する共同体(村)にた
いして転換料金を支払わねばならぬことにな
っている。サモアにおいては、森林をタ
ウレアレアが開拓した場合、そこは彼の農

地として認められるが、マタイの土地とは
異って、土地裁判所に登記されることはな
く、しよせんたんなる用益権にすぎない。

以上のように個人的農地の発展が見られ
るが、ポリネシアを全体として眺めると、
家族または親族集団、あるいはそれらの集
団の所有する土地を意味する言葉として、
トンガの *kainga*、サモアの *ainga* (サモ
ア語では *ka* の発言は消える) 系の用語が広
くポリネシア一円に見られる点に、ポリネ
シアの基本的な土地所有の共通性が認めら
れる。カインガとは火をもやすところの意
である。

ポリネシアでは、血筋が男系を通じ、土
地も男系を通じて相続される父系・父権社
会である。これにたいして、とくにニュー
ギニアとポリネシア間のメラネシアでは、
血筋は女系を通じ、土地はヴァスウ(*wasu*、
ster's son) に伝えられる。この点で明確
な相違を示している。

現在のポリネシアでは、ヨーロッパ人の
強行した土地制度の改革を通じて、完全に
個人的土地所有に解体し、しかるのちに土
地のほとんどが外来のプランターの手中に
帰ってしまったハワイおよびニュージーラ

ンドを一方の極として、いまなお葦因に共
同体的土地所有を保持している、たとえば
クック諸島のブカバカ島を他端の極として、
その間に、土地所有の種々の変化形態が認
められるのである。
(蔽内芳彦)

六朝画像石の問題点

長広 敏雄氏

六朝時代には多くのすぐれた画家があら
われ、絵画についての深遠な美学がすでに
うまれていた。しかし、そういう有名画家
の作品のみならず、中級下級の作品さえも
消滅しているのが現状であるという認識の
上に、六朝絵画史学はどういう風にして成
立させうるのか。

このような悲劇的情況のもとに、私にと
って、考える方法は、六朝画像石の様式
史的究明である。それを支えるものは、顧
愷之・宗炳・謝赫などの発想である。上か
らの美学¹⁾ではない。むしろ、即物的な
²⁾下からの芸術学³⁾だけがそれを支えるこ
とができる。

六朝画像石が、これまで、内外の学界で
あまり問題にされなかった理由は、いくた
の困難がその資料研究の段階に伏在するか
らである。そういう問題点に鋭いメスを入

れることを、私ははじめた。一九六六年九月、渡米中に調査した重要な画像石作品について、次のような諸問題を指摘できる。

(1) サンフランシスコ市ド・ヤング美術館、ボストン美術館、ミネアポリス美術館、カンサス市W・R・ネルソン美術館の北朝画像石はいずれも六世紀の作品と推定される。北魏または北斉とする推定はおほまかであるが、だいたいみとめてよい。ただしボストン石室画像は、一部に偽刻がある。

(2) 北朝系画像石の描写主題には、孝子伝図が目をはひく。次に貴族宴楽図、出行図。鬼神図、四神図。また仏教説話図、浄土図。特色としては山岳、樹石の執拗なくりかえし、ならびに隙間のない地間充填である。人事への興味が山岳・樹石への興味に圧倒されている。

(3) 北朝系の画像表現のこのような特色は、南朝の原型を模倣し、発展させたのではないかと想像するが、これを証明するには、南朝宋齊時代の遺品の発見を俟つほかない。

(4) 後漢画像石は三世紀初頭で衰え、北朝画像石の現存品は六世紀を遡りえないとすれば、両時期のあいだに二百五十年以上のギャップがある。六朝絵画が最高潮に達し

た東晋・劉宋時代の画像石が発見されないこと、したがって南京西善橋の南朝墓の磚刻画「竹林七賢図と榮啓期」(晋宋間の作品)の存在はきわめて貴重なこと、などのもっとも大きな問題点といつてよい。

(ともにスライド使用)

(長広敏雄)

学界消息

読史会 秋季大会

昭和四十一年十一月三日(祝) 午前九時半〜午後五時

於 京大文学部第一講義室

平家物語の成立について

日本塩業史における休浜替持法の研究

河手 龍海

佐賀藩における知行の切地と上支配について

城島 正祥

「国語」覚書

末中 哲夫

日本対韓文化政策

大月 明

民主主義より民本主義へ

彭 沢 周

——大正デモクラシーの転換—— 松尾 尊彦

〈特別報告〉

田能遺跡発掘調査の概要(スライド使用)

村川 行弘

東洋史談話会 大会

昭和四十一年十一月三日(祝) 午前九時〜午後五時

於 京都大学法経第七教室

漢代の選挙について

永田 英正

新羅の律令制度

唐律における奴婢身分の規定基準について

西嶋 定生

初期イスラム時代エジプトの税制におけるジズヤについて

清水 誠

永樂帝の北征とその背景

萩原 淳平

范氏義田における清末の小作制度

伊原 弘介

太平天国研究の現状について

石田 米子

別伝の研究

矢野 主税

兩税法の実施状況に関する若干の問題
——唐から宋への展望のために——

中川 学

唐代の陶器器産業について

愛宕 松男

西洋史読書会 大会

昭和四十一年十一月三日(祝)午前九時半〜午後五時半

於 京都大学東友会館

初期アテナイの海運事情とナウクラリア

向山 宏

サクソン時代の封建領主裁判権と王政

富沢 需岸

マグナ・カルタをめぐる一考察

——マグナ・カルタと領主裁判権を中心に——

森岡敬一郎

ブロイセンにおけるリューベック法都市について

山田 作男

ビロ・デラ・ニランドラの《Oratio de hominis

「Ignitate」について

新井 眞一

分離の危機における共和党の政策

山岸 義夫

信条帝国の形成

——現代アメリカのコンフォリズムについて——

志郷 晃祐

ズデーテン・ドイツ人とクリストリア・スラヴ

主義の再検討

広実源夫郎

ドイツ社会民主党と七月危機

篠塚 敏生

マックス・ウェーバーとドイツ史学

西山 勤二

ルソーとフランス革命

前川貞次郎

内陸アジア研究会

〔内陸アジア研究所(羽田記念館)〕羽田記念館は京都大学名誉教授故羽田亨博士の学問的業績を記念し内陸アジア研究を振興するため、故博士の生涯の友であった三島海雲氏を理事長とする三島海雲記念財団の寄附により建設されたものである。

昭和四十一年四月、京都大学に寄託され、文学部の附屬研究施設となった。その運営については、文学部に運営委員会が設けられ、これにあたっている。これまでに「五体清文鑑訳解」上巻を発刊し、現在は下巻を印刷中である。

例会

六月九日 於羽田記念館(以下同)

モグーリスターン社会史序説

問野 英二

六月三十日

カルムツクにおけるラマ教受容の歴史的側面

九月二十九日

佐口透著「ロシアとアジア草原」書評

水谷あもり

十月二十日

オスマン・トルコの起源について

——特にその侯国の成立—— 斎藤 淑子

十二月三日

中世ウイグル文人身関係文書について

山田 信夫

十二月八日

イスラム社会経済史研究の動向

——第二次大戦後の欧米を中心として——

ヨーロッパの東洋学その他 清水 誠

内陸アジアに関する研究ならびに討論の大会

昭和四十一年十一月一日(火) 於羽田記念館

北アジア・中央アジア史研究の現状と課題

香山 陽坪・佐口 透・内田 吟風

護 雅夫

人文地理学会 大会

昭和四十一年度

去る十一月三日から六日にかけて、日本地理学会と共催で行われた。

研究発表題目

一般研究発表(十一月三日)

- 弓ヶ浜半島の形成過程と海岸侵蝕 藤原 健蔵
- 屋久島の海岸段丘 中田 高
- 本州西端地域の海岸段丘と地盤変動の傾向 小野 忠熾・河野 通弘
- イスラエルの地形 木曾 敏行
- カリフォルニア南部の活動褶曲 貝塚 爽平
- 吉野川下流南岸の地形 寺戸 恒夫
- 石鏡山断崖下の地帯の地形と地殻運動 松本 栄次
- 奥三河高原における陥穴侵蝕の分布について 伊藤 隆吉
- 八ヶ岳泥流の諸問題 守屋喜久夫
- 化石構造土をめぐる諸問題 藤木 忠美
- 昭和四十一年六月二十八日台風四号豪雨による横浜市内の崖くずれについて 田中 茂
- 鳴子貯水池の堆積物と流入水との関連について 羽田野誠一
- 日本近海海底地形図 川上喜代四・茂木 昭夫
- 日本各地の下層ジェット気流について 長谷 実・佐藤 任弘
- 小林 望
- 庵原における冬季最低気温・風の局地気候的特性 岩崎 尚・中川 行夫・小中原 実
- 最低気温分布におよぼす地形・植生等の影響の

評価に関する研究

- 本郷台、白山における地下水位変化 岩崎 尚
- 利根川水系とくに吾妻川水系における水質の変貌について 三井嘉都夫・井上 奉生
- 都市化の進展と水害 日下 雅義
- 桂川右岸の場合——
- 台湾省嘉南地域における農業水利問題 渡辺 操
- 台湾省農業地域研究第一報——
- 中国の農業水利の基本的動向 西村 高夫
- 淡路島の温室園芸地域 松井 貞雄
- わが国における農業生産性の地域的差異とその要因分析 山本 正三・奥野 陸史
- 日本の労働人口の現状と将来予測 浜 英彦
- 人口の日日移動からみた中心諸核 岸本 実
- ヒマラヤ地方の人口 高山 龍三
- わが国の中心企業団地について 沢田 清
- 山口県周東地域における温州ミカンの産地形成について 新宅 暢久
- 紀ノ川筋における柑橘の産地構造 坂本 英夫
- 開墾公園の性格と構造 坂本 英夫
- 第1・第2次の開墾公園拡大の比較考察——
- 大都市周辺における農業地域の諸類型 大迫 輝通
- 安藤万寿男

河内地方における耕地整理・土地区画整理区域

- 筑前国穂浪郡の糸里と郡家および屯倉 大越 勝秋
- 近世初期毛利藩における地方的中心集落 日野 尚志
- 火山麓の開発に関する一考察 小林健太郎
- 特に若木山麓を中心に—— 福田 徹
- スギのさし木林業に関する歴史地理学的考察 松村 安一
- 西国街道の宿駅と助郷について 玉置 哲郎
- 相模大山信仰登山集落形成の基盤 浅香 幸雄
- 信仰登山集落の形成第3報——
- 「郷土出身人物」の地域差について 千葉 徳爾
- 地図地名の標準化 山口恵一郎
- 読図学の提唱と方法論 榎松 静江
- 川内川の洪水と鶴田ダムの意義 服部 信彦
- 多摩川水系三沢川の水害 森滝健一郎・角南 泉
- 「開発」にともなう「破壊」——
- 徳島新産業都市地域における生産基盤の造成と漁業補償 第二報 重見 之雄
- 録音面接法による八丈小島における島外移住問題の調査について 大村 肇
- 漁業不振と奥丹後漁村の変貌

——拡がる機業兼業—— 島田 正彦

毛利藩政下の沿岸漁村

——特に長府藩領を中心として——

新宅 勇

ろう石山の市場と窯業の立地

——岡山県東部の耐火物生産を中心に——

樋口 節夫

小都市・厚木の工業開発

ニューヨーク都市圏の大量輸送方式

山口 守人

生活地理学の必要性

——国民生活の変化と都市集積を中心として——

二神 弘

〈近畿の地形〉(十一月四日)

加古川の段丘地形

伊勢・宮川の段丘地形

清水馨八郎

紀ノ川の段丘地形について

大辻 裕彦

花崗岩山地における風化地形について

土橋 昭三・谷村 光司

近畿地方の線状構造地形分布図の作成

土橋 巖・川勝 豊久

大阪平野の段丘面の考察

明石海岸における海蝕崖の後退について

池田 碩

巡検のための近畿の地形・地質概観

羽田野誠一

岡 義記

前田 昇・高浜 正子

水山 高幸・藤田 和夫

〈特別研究発表〉(十一月四日)

京浜近郊農業圏の形成と地域構造の特色

——欧米の近郊農業圏との比較からみた——

尾留川正平

瀬戸内海漁業の当面する諸問題

工業立地における立地論

河野 通博

村田喜代治

京阪神大都市圏についての二・三の問題

小林 博